

寫經より見た過去現在因果經畫卷

伊 東 卓 治

五

前節により、第六世紀前葉頃の書寫本をもとにして、大體第七世紀の初め頃迄の間に寫された古寫經の系統本が、いつの頃にかわが國に傳へられて、筆寫再寫された。それが報恩院本或は上品蓮臺寺本の系統であり、又別に、第七世紀の後葉頃以降整理筆寫された寫經がもとになつて東京美術學校本が書寫されたことを知つた。それ故こゝで項を改め、我が國に於いて繪因果經は何時書寫されたか、或はその書寫狀況如何を考へてみたいと思ふ。

先づ書寫年代であるが、古因果經には然し年紀録をのこすものは只の一卷もなく、しかも現存の遺品五點とも夫々に書風を異にし、従つて筆者も、更には時代迄も亦多少異にする向も見られて、一概には云へない。一々に當つて、その事情を明かにしなければならぬ。

古因果經五點を見渡すに、上品蓮臺寺本、報恩院本、益田氏舊藏

寫經より見た過去現在因果經畫卷

卷第四上殘卷は、一面同じ様式の書風を示して居る。そのうち報恩院本が最もしつかりしてゐて最も書もうまい。上品蓮臺寺本は報恩院本に頗る近似してゐて同筆かとまがふばかりであるが、仔細に觀察すれば必ずしも同筆ではない。上品蓮臺寺本は少し間のびがしてゐて、出來も落ちる。益田氏舊藏本は上品蓮臺寺本に似るが更に間のびが甚しくて、いはゞこれらの間柄は、報恩院本——上品蓮臺寺本——益田氏舊藏本卷第四上といふ配置關係になるやうに見受けられる。之等に比較すると益田氏藏卷第三上は、庸弱な書で、これらに似るといふには餘りにも遠く、系統は系統だがその紊れた書き振りは、おのづから時代を一時代異にするものがあると鑑定される。かゝる中にあつて、右のそれらに對して異なる様式を最も顯著に示すものは、東京美術學校本である。そしてこの際一段と興味深く思はれることは、報恩院本その他が明かに一群をなして東京美術學校本と區別されるといふことであつて、前節に於いて祖本の異別が明かにされたものであるだけに、殊に注目すべき異同であると思は

れる。

それ故、古因果經の書道は、二つの類に分けて比較觀察することが便宜と思はれる。そこで大體ではあるが各の特色を抜き出してみると、報恩院本は書形整齊にして劃律殊に確然とした書で、形を尙び筆の正しさを主張する隋唐の書道、わが奈良時代書道の性格を表示してゐる點は、先づ以つて注目される特色であらう。美術學校本は之に比すると書形に紊れがあつて報恩院本程整齊ではない。然し根底は矢張劃律整へる書であることは報恩院本の流派と大差なく、同じ性格の書で、矢張り唐代書道、わが奈良時代の書道に屬するものである。即ち大きな性格から云へば、この兩者は同じ時代範疇に屬する書道といへるが、然し各個に就いていふならば、表現形式は随分ちがつてゐる。

先づ目立つのは文字の結體だが、文字の結體は、報恩院本はかつちり四角に構成されようとして居り、美術學校本は四角だが、どちらかといふと扁平に見える傾向にある。そこでかゝる結體を構成してゐる線狀を見ると、報恩院本は、横劃は主として細く、それに比較して豎劃は太く、又左右へ出るはねは餘り突き出してはゐない。一言にすると、結體は扁平でも豎長でもなく四角に固つてはゐるのであるが、豎の線に重みと背高さが與へられてゐて、一種丈高き感じを與へるやうな運営があるのである。美術學校本は、横劃に伸び伸びした伸長の氣分が與へられてゐて、豎劃は恰も之を支へてゐる柱のやうに見える。例へば言の字の第二劃が左方に長くつき出て口

の豎劃が下部でこれを支へてゐるやうに、又居の字の左方に出たはねが少し角度を廣くして倒れるやうに伸びてゐるなど、四角の字形が扁平な姿に傾かうとする傾向に見えるのである。これらの差は確かに報恩院本と美術學校本とを區別する大きな特色の一といふことが出来る。又筆線の太さ細さも氣付かれる所である。報恩院本は全體としてみて筆線は部厚い。肉太といふのではないが、太味のある線で書かれてゐる。美術學校本はやゝ細味で、報恩院本に比して骨書の觀がある。そして筆のあたりも、報恩院本は強く打ち下ろして一旦筆を廻してひき下げてゐる。美術學校本では、やゝ斜め左に頸を傾けたやうに軽く筆をあて、そのまゝ素直にひき下げてゐる。そして筆の速度は美術學校本の方が少し速い。それ故、これらの諸因素によつて全體より受ける感覺は、報恩院本が篤實敦厚にして沈着であり、美術學校本は勁秀犀利にして俊英である。一方は落着き、一方は爽快である。

然らばこのやうな特色を持つ寫經は、わが寫經史に於いて何處に屬すべきであるか。

では同筆と見られる古寫經が現存するかどうか。現存してゐてくれ、ば話は最も簡單だが、不幸にして全然同じといふのは見當らない。然し同系統と思はれるものが美術學校本の方には存在する。依つて先づ美校本より考へて行かうと思ふ。

美術學校本と同系統として最も注目すべきは、守屋孝藏氏藏の國寶千手千眼陀羅尼經一卷である。これは天平十三年七月十五日（西

七四)僧玄昉が聖武天皇元正天皇光明皇后の聖壽の萬歳と恒永を祈願して敬寫した千手千眼經一千卷註一のうちの一卷であるが、その書風の細勁にして清爽たる趣きは、正に美校本を一段と謹嚴にしたものといつてよい。力とか議とかいふ字の體制は全く同じ方式であり、こちらの方がゆつたりとして居て美校本の方はいぢけてくしやくしやとしてゐる相違が見られる位のものである。又この系統は天平十二年(西紀七四〇)の光明皇后御願一切經即ち五月一日經中には相近きもの、例に富み、自愛經(本山彦一氏舊藏)或はこれと同類の善恭敬經(某氏藏)等殊にその筆法が似てゐる。五月一日經の奥書には更に趣致のよく類似するものがある。

このやうにすると美校本の書風は、天平十二年十三年の五月一日經或は玄昉發願經に見られる書風の一系列に屬するといふことがわかる。然らば、この書風は奈良時代如何なる範圍に互つて榮えてゐたか、寫經の研究者田中地堂氏はその著古寫經綜鑒、寧樂寫經に於いて奈良時代寫經を書風より系統分けをした中に、天平盛期の寫經を唐經系として左の數點を例に擧げて、

- 一、長屋王發願大般若經中(神龜五年西紀七二八)
- 一、聖武天皇勅願佛頂尊勝陀羅尼經(天平十一年西紀七三九)
- 一、光明皇后御願一切經中大部分(天平十二年西紀七四〇)
- 一、紫紙金光明最勝王經(國分寺經)(天平十三年西紀七四一)
- 一、唐僧善意大般若經(天平十九年西紀七四七)
- 一、法隆寺行信大般若經(神護景雲元年西紀七六七)

寫經より見た過去現在因果經書卷

そしてこの流派は神龜より天平に榮え、神護景雲元年の行信經の中にその名残を止めてゐるといふのである。仲々面白い。尤も、この分類系統でいふ唐經風といふ意味は吟味を要するかとは思ふ。わが國の寫經は、最も古い金剛場陀羅尼經(小川氏藏。丙戌年)以下全般的に云つて唐經の書風を遵奉して居り、和銅五年の長屋王發願大般若經など云ふ迄もなく唐風を主體として居り、殊にその願文の筆寫には二手あるが、そのうち、一種の扁平にして左右に暢達の氣を伸ばしてゐる書風は唐も高宗の頃の阿毗曇毗婆沙卷第六十・毗婆沙序(六六二)(書道博)(龍朝二年)や金剛般若波羅蜜經(六七五)(上元二年)(同上)と全く同じ趣あるものであつて、和銅頃の人の書風の一斑を依つて以つて伺ひ得るが、經文の中に於いても同様に又この趣あるを見るのである。このやうに時代の古いところさへかうである。まして時代が下つてくれば、凡そ奈良朝の寫經は唐經風であるといつて大過はない。だから、こゝで特に唐經風といふ一目を分類例示に示すといふのは、或る特色を指示した含みある言葉であると思ふ。それ故、これは所謂天平の代表的寫經に見られる色々支流派を含めて綜鑑した、天平盛時の概説であらうから、扱て美校本の系統はといふと、その中のどれかと當てゝみなければならぬ。すると、神龜經は別系であり、佛頂尊勝陀羅尼經はやゝ近いが、その跋文には同系を思はしむるものがあるから、先づこの邊から取り出すと、同系として最も近きは五月一日經と紫紙金字金光明最勝王經とである。そして善意發願經はやゝ遠いがその跋文は正に同系であり神護景雲元年の行信經には

尙一般の系統を認めることが出来る。それ故美校本系統としては、大體天平十一年の頃、五月一日經のあたりから、尠くとも神護景雲の頃迄存在してゐたといふことが出来る。

では、この系統の書風は當時わが國にあつてどのやうな位置にあつたか、寫經文化史の面から考察してみると、第一に天平十一年五月四日の佛頂尊勝陀羅尼經一千卷は、僧玄昉の病氣平癒を祈願せられての聖武天皇の勅願經であり（高野山正智院藏^{註二}）、五月一日經は光明皇后が御母故橘夫人七回忌に當り、御兩親の追福の爲に一切經論及び律を寫さしめられたものである（聖語藏御物並諸家藏^{註三}）。千手千眼陀羅尼經は既述の如く僧正玄昉が、當時惡疫流行に當つて皇家の御安泰を祈願するものであり、紫紙金字金光明最勝王經は聖武天皇の勅願經にて、天平十二年の詔勅に依り、國分寺七重塔に安置せしめられしものと想像される（西國寺並龍光院藏^附）、又唐僧善意發願大般若經（根津美術館藏）は僧正玄昉が在唐中の弟子にして、玄昉に従つて日本に移つてきた唐僧善意が、玄昉の一周忌に大般若經一部六百卷を私財を投じて寫さしめたものである。時に天平十九年十一月八日である^{註四}。行信僧都發願經は、夢殿の復興を念じた法隆寺の僧行信の發願したものゝを、中道に於いて示寂した師の遺志をついで、その弟子孝仁等が法華經二千七百卷を寫して、神護景雲元年に東院（即ち夢殿）に納入したものである（法隆寺藏^{註五}）。

〔附〕正倉院古文書や續日本紀等によると、國分寺七重塔創建や安置すべき金字經書寫等中々の大事業であつたと見え、寫經も十八年頃迄はつゞけ

られてゐる。そして金字經の書寫のためには特別に金字經所といふのが設けられてゐて、紫紙金字金光明最勝王經の書寫關係の天平十八年の古文書が正倉院にある。尙正倉院にはこの金字經のための經帙が遺存され、それには「天下諸國每塔安置金字金光明最勝王經及依天平十四歲在壬午春二月十日勅」といふ文字が織出されてゐるから、大體その頃を以つて書寫されたものと想像する。

之等の由緒に徴してこの系統の書家は天皇の勅願皇后の御願に撰ばれ、殊に當時最も重要と見られた經卷、例へば國分寺七重塔の每塔安置の金字經のやうな經典の書寫に撰ばれた一派であることがわかり、寫經所内に於いても代表的經生を以つてあてたのではないかと想像もされる。此等の諸經が特にすぐれ、他に比して生彩あるのも、そのためかと首肯される。それ故に又、或は天平十二三年頃の奈良朝書道界の主流をなしてゐたと見て差支へないであらうか。

こゝに尙一つ、想像をめぐらしてみたいものがある。それは、玄昉關係の寫經が多いといふことである。玄昉は天平七年に唐より歸朝した時には經論五千餘卷及諸佛像をもたらしたといふから、或は色々の唐の書道を將來したであらうと想像される。この一系の隆盛は亦何等かの因縁を玄昉の將來經に持つかもしれないのである。それにこの一系の書道は、唐でも盛唐に屬し、細味で鋭く、やゝ扁平に見える程、張るべきは張り伸ばすべきは伸ばしてゐる。書道博物館にある金剛般若波羅蜜經は高宗の上元二年三月廿二日秘書省楷書賈敬本寫^{（西紀六七五）}といふ奥書があるもの、又同上藏彌勒上生經、これ

書道博物館藏

挿圖第一 阿毗曇毗婆沙卷(唐經)奥書

挿圖第二 金剛般若波羅蜜經(唐經)書道博物館藏

には則天武后の久視元年九月十五日(西紀^{註七}七〇〇)云々の奥書があるものであるが、これ等は左右へのひろがり^{註八}に於いてこの一系と一脈の似たものであるを覚える。かゝる意味の鋭さは唐代書道では既に高宗の龍朔二年七月十五日(西紀^{註九}六六二)經生沈弘書寫の阿毗曇毗婆沙卷(書道博物館藏)に劃律正しく出てゐるものであつて、この流風は五月一日經中の大部分に見られる特徴といつていい。

尙これにつけ加へて興味あることは、正倉院に光明皇后御筆藥毅論^{註九}一卷(天平十六年^{西紀}七四四)又眞福寺に瑠玉集一卷(天平十九年^{西紀}七四七)がある。前者は王羲之の臨書であり、後者は逸事瑣聞の古鈔本ではあるが、その筆法や趣致に於いて、この一系と一脈の疏通を感じるものがある。或る意味では當時の用筆の特性にも關係するかと思ふが、流派の特色でもあるといはれ得る。つまり、之は王羲之一派の書を追究する者の歩んだ途であつたのではないか。

依つて私は次のやうな事を考へてみる。唐の太宗が王羲之を崇拜してその風を流行せしめたことは有名な話で、盛唐の寫經が王羲之の風味で貫かれる所があるのもその爲である。わが國亦唐朝の風尚にならつて、書といへば羲之の風を習ふことであり、寫經又彼地の流行を追つてゐた。一面には上流社會では王羲之や王獻之の法帖を手に入れて鑑賞的書道の途をひらいてゐたと思はれる。それ故、皇室、王羲之書道、玄昉、盛唐寫經と考へてみると何等かの脈絡が想像されるやうに思はれる。皇室に關する寫經には王羲之流派を趁ふものを以つて之に宛てたのではないかと想像される。又この流派

が持つ清楚なる六朝的感覺も亦自然理解される。

このやうに理解するならば、この流系に屬すると思はれる美術學校本の寫經體の意義も、自然と了解がいくと思はれるから、その序述は省略に従はう。只美術學校本に於いて意をめぐらさねばならぬ所が一つある。それは書き上げが如何にも紊れてゐる個所のあることである。字配りや行間の不統一、上下左右の不揃ひ（前號圖版第三圖參照）等、きちんと書かれた寫經に見なれた目には非常に目立つ所である。すつきりと行儀よく書いてある場所と紊れた所とが、間歇的に交つてゐる。全卷を通じて見渡すと、どうも疲れてくるとかういふ小紊れが現れるやうである。思ふに筆者は割合に神經質にして體質が弱く、氣力がつかなかつた爲のあらはれでもあらうか。何れにしてもこの紊れが、この書寫年代測定に累をなしてゐる。

大體論として、この書寫年代は、この流派の一派が屬する天平より神護景雲の間とはいへるであらうが、さう簡單にはいかぬかもしれない。何故ならば、このやうに紊れてゐるといふ例は餘り他にないからである。するとこれに對して假想説が尠くとも二つ出てくる。一は、筆者は寫經生として經驗が淺かつたといふ前提から、流派全體の上から云つて、この流派の初期的なものと思ひ、天平中期の完成以前といふことになる。すると天平の初期の作とする説が出てくる。も一つは、寫經事業の衰微の結果寫經生の養成が思ふやうにならなくなつて、もうまともに行儀よくは書けなくなつた時期に書寫されたとする。すると大體奈良朝末期よりもおくれで、平安

時代初期になるといふ説が出てくる。尠くとも寶龜頃の作かとなす考へも出るのである。依つて私はこれに就いて、一つの手がかりとして奈良朝時代文書の一般的傾向に依る判斷を加へてみたい。

正倉院御物その他奈良時代古文書を、大日本古文書、南京遺文、南京遺芳等に依つて、觀察しつゝ、一般的傾向を見ると、大體天平時代古文書は、細味の線で素直で清らかな感じである。行儀のよい行書である。天平勝寶にかけて段々と潤達となり氣力が横溢するやうになり、神護景雲等の時代になると、重厚な書風、自在なる書道が續々と出てきて、書の氣風が漸く一變したことを示してゐる。特に一般文書としては天平に對して荒れが目立つてくる。これを以つて一概にはいへないが、美校本の紊れは、蓋し、かゝる傾向のある時代の反映とでもいへないであらうか。かゝる點で美校本は、天平よりは後といふことになり、生氣潑刺として潤達の風を帶び、しかも整齊は天平盛期を偲ばせるものを含むところがある點を考へると、恐らくは天平を去つても餘り遠くはない時期かと思はれる。それ故わたしは天平勝寶の頃を指定したいと思ふのである。

それ故わたしは二つの假想説の前期にも後期にも當てることは考へにくいと思ふのである。殊に前期はわが寫經史上でも嚴格な書道を以つて貫かれてゐた時期に當つてゐること、又後期は、寶龜延暦にかけて寫經界一般に、筆線が生硬になりどぎつくなつて薄つぺらになる。つまり輕薄な和臭が露出する時期となつて居り、美校本の如き彈力のある勁線とは時代意識が異なるやうに思はれる。若し夫

れ、それ以降の寫經といへば一途に庸弱な書道に墮ちた時期であるから、更に考へにくいのである。所が天平勝寶の頃には、寫經で書風紊れたものもある時期であつて、例へば天平勝寶四年(西紀七五二)の大乗阿毗達摩雜集論第十六卷(石山寺藏)^{註十一}或は同年(西紀七五五)の六人部東人等發願一切經の中の大唐內典錄卷第十(根津美術館藏)^{註十二}など、筆法も弱く形も整はなくなつてゐる例である。之を寫經史に見ると、天平寶字になると、新書道が華々しく出てきて、これ迄の古い流派が壓倒されてしまふ。この頃は丁度その推移の時期といへるのであり、しかもこれらの流派は、美校本もそれに含めて、壓倒された古い方の書系に屬するのである。新しい流派とは、唐の睿宗玄宗の頃の肉の多い中唐の書道の影響を見るもので、恐らくは所謂大聖武と呼ばれる賢愚經の如き、威壓を感じるばかりにいかめしい、部厚い筆のものが時代をさらつて行つたのであらう。田中塊堂氏は、古寫經綜鑑、寧樂寫經で、大聖武風の寫經は、歸化經生の書で、多分天平末期にはあらはれてゐたのではないかと想像をしてゐるが、それが寫經界に新鮮な空氣を注入したことになり、かくてそれ迄に榮えてゐた盛唐風の寫經體を驅逐して、新書道が登場した。それが天平寶字の阿含經書寫の一派であると述べてゐるが、誠註十三に傾聴すべき説である。これを逆に驅逐される方の書道からすれば正に焦躁を感じる時期に當る。美校本亦この期に當るのではなからうか。

このやうに見てくると、美校本が持つ、やゝ行書風に筆尖のつゝいた書き方が、天平寶字二年(西紀七五八)の東大寺獻物帳(正倉院御物)に見

寫經より見た過去現在因果經畫卷

られる落筆の筆あたりと相似るものがあるとするならば、正しく美校本は、天平勝寶前後といつても、天平寶字にかけた年代を含めていつたらいゝのではないかと思ふのである。

では報恩院本の方はどうであらうか。

これに類する、或は同系と思はれる寫經を探してみたが、どうもよく見當らない。それ故廣く奈良時代の寫經に當つて、比較的指定の許されるところを考へてみたいと思ふ。

報恩院本は先にその特色を抜き出したやうに、劃律整齊にして沈着な風趣があるから、これ迄史家は舉つて和銅經の趣あるものとされた。然し因果經の書寫を和銅年間に迄持つていくことは、寫書生從八位の墨書が聖武天皇の御代以前に持つて行くことの困難から成立し難いことは既に第一節に説く通りである。

では神龜天平にはいつて多少とも相似るものがあるかといへば、

先づ第一に天平七年聖武天皇勅願一切經中の觀世音菩薩受記經(根津美術館藏)^{註十四}が注目される。これは和銅經の初唐風のものが更に緊密になつた書風であつて、氣分から云ふと報恩院本と一脈通ずるものがある。然し報恩院本の方には、筆にふくらみと柔かみとがあつて、この筆法は何となく受記經よりは以後の習氣を藏してゐるが如く感ぜられる。然らば報恩院本に見られる筆線が少し平たくなつたやうな、一種の肉のある、たつぷりと墨を含んだ書風のものがあるかと探してみるが、それが中々見當らない。そこで結體としての緊り方と筆のふくらみと、この二つの要素に於いて各個に當つてみる。

筆法の方では天平十年石川年足願經佛說彌勒上生經(石山寺藏)^{註十五}が

僅に注目をひく程度であつて、ずつと見當らない。然しながら結體

の方からいくと、かつちり四角に緊つた書形で特色最も著しい紺紙

銀泥華嚴經(二月堂燒經)^{註十六}が目につく。殊に小じんまり緊つた結體に

は、報恩院本と全く相通する精神が見られて、時代の最も相近づく

ことを感ずる。然らば燒經はいつ頃の書寫かといふと残念ながら年

紀銘がない。然し、この燒經には肥瘦二體の書風のものがあつて、瘦

せた方は紫紙金字金光明最勝王經のそれに類似してゐる。この金字

金光明經については、美校本検討の時注目した通り、天平十三年か

ら十八年位の間に書寫されたと思はれるものであるから、燒經の書

寫年代も大凡その頃に當るといふことにならう。思ふに天平十六年

十月聖武天皇の勅により東大寺に始めて華嚴經會が修められた。^{註十八}或

はその時の料であらうか。料紙から云つても紺紙といふ色紙を使

ひ、又墨料もわれわれは銀泥といつてゐるが決して銀のやうにやけ

るものではない、何かの合金で書かれてゐる。この料紙墨料の華美

なる取合はせから云つても、勅旨經にふさはしいやうに思はれる。

若しこの推定が當れりとすれば、燒經は天平十六年書寫となる。し

てみると天平十六年頃には國分寺經風と共に二月堂燒經風のもの

が相並立して榮えてゐたことになり、そして多少肥えた太字の燒經

の風に報恩院本は近いといふことになる。然し報恩院本の方は字の

緊り方が、燒經に比して今一段と至らない所があり、燒經の方が更

に發展した様式を具ふる段階であることを示してゐるやうに思はれ

る。根底を貫くものには同じ精神はあつても必ずしも同系とはいへない。然し筆寫年代は恐らく相近いものと思はれる。

では天平盛時即ち奈良寫經の中期に於ける大字系の有註經をば如

何と見るに、多少肉太くある點は似てゐるが燒經程には近く感ぜら

れない。殊に賢愚經の如きものに至つては肥重の偏癖全く相似る所

はない。かゝる中にあつて只一つ注目さるゝ所は、天平勝寶八年の

東大寺獻物帳(正倉院御物)^{註廿}である。これは聖武天皇崩御の七七忌に

際して皇后光明子は天皇の御手許の珍寶を擧げて東大寺に獻納せら

れたときの文書で、恐らくは當時第一等の書生に清書せしめたに相

違なからうと思はれ、それ故に又一面天平勝寶頃の傾向をも察知し

得るかと思はれ、好都合の資料である。これをよく見ると、字格整

齊にして嚴肅なものであり、線は稍太味になつて、細・太の變化な

く、一押しに押した眞面目な書である。之を寫經書道史に組んでみ

ると、天平盛期の大字經系例へば註楞伽經卷第三(加納白鶴氏藏)^{註廿一}の

如きものゝ、その書き方に更に肉付きのいゝ重々しい書風が進展し

たものであり、この傾向は唐代書道が睿宗玄宗の頃から一變して肥

重な書風となり、我國亦その流風の影響をうけて一轉の萌しを示し

たものである。殊に玄宗の石台孝經の如き、肥滿凝重の偏癖の多い

書風、例へば賢愚經系のやうな書風の傳へられるや、わが寫經界も

一變して、天平寶字の頃には阿含經系あたりの稜角を露出する書風

となつて行つたことは、既に先に少し觸れた所である。かくて端嚴

清麗だつた天平寫經は驅逐されて、いかついが、堂々たる書風によ

つて發展するのである。これが即ち奈良朝後期の寫經となるわけであるが、この獻物帳は、丁度天平經の展開の最後であつて、未だ賢愚經の影響を示さないが既に中唐書道の習氣を持つて來た書道である。そして報恩院本は、これと可成相似た趣致、嚴肅味がある。獻物帳は天平初期のやゝ扁平氣味の寫經に對しては、既にはつきりした豎長の書風を示し、成程天平寶字神護景雲と打開されて行つた基底を見るの觀がある。然し報恩院本は、これに比較すると、豎横の

國立博物館藏

挿圖第三 美人董氏墓志銘(隋)拓影

線が各それ自身の異なる呼吸で書かれてゐて、尙一面の古風を存してゐるから、結體が眞面目だといふ點などからして、様式上報恩院本は、獻物帳よりは以前の方式を傳へてゐると思はれるのである。

これらの諸點から綜合してみると、報恩院本系統は、天平勝寶頃よりは以前といふことになるのではなからうか。そして結體の精神からして燒經を、氣分からして受記經と多少とも相似たものを合せ考へると、天平中期頃といふ措定が出てくるのである。

畢竟このやうに類例を缺くといふことは、報恩院本の書道の源流の特異性を示してゐるのかもしれない。わたしは未だ直接隋唐書道にこれと同系と思はれる好例に接しないので例を擧げることとは出來ないが、二月堂燒經の結體の緊密なことは、唐高宗の儀鳳二年(西紀六七七)の奥書のある文館詞林(正智院藏)或は無銘ではあるが唐經靈(註廿五)飛經などに見られるもので、報恩院本がこれらにたつぷりした豊かな筆使ひで、もしゆとりのある書き方であるといふと、或はそれ以前の高宗太宗の頃の一種の書風を指すとすべきであらうか。といふのは隋の文帝の開皇十七年(西紀五九七)の美人董氏墓志銘(註廿六)に見られるやうな習氣の尙唐初に傳へられるものといへるものではなからうか。その意味で虞世南の風の加味をも感じ得るのであるが、つまり、隋、唐初と殆んど區別されない文化意識から、盛唐風の文化形態が生れてきた頃の書を受けてゐるのではなからうか。それ故に殆んど盛唐風の書道に貫かれてゐる奈良朝中期の寫經に類例が稀となつたものであり、従つて書寫年代の推定を困難ならしめてゐる理由とも

なつたと思はれる。

すると、卷末墨書の書寫年代がどうかといふことになるのであるが、これに就いては既に第一節に於いて觸れた通り、文書の持つすがすがしさや、筆線の柔かみの加はつてゐることなど、正しく天平期といつてよいと思はれる。殊に「書」の字などは五月一日經の中に含められる根本説一切有部毗奈耶等^{註廿七}の寫經に見られる褚法の亞流である。「從」の字などに見る筆の動きなどは、天平三年の聖武天皇宸翰^{註廿八}雜集の奥書と相通するものであり、只雜集は鋭く勁いが、こちらは柔軟の氣があり、奈良時代書道の推移の通り、それよりは以降のものである。この筆意といふ觀點よりする奈良書道の概観は、養老大寶等の文書は勁直の筆意で、以後天平初期頃尙銳いのであるが、中期以降段々と柔かみがいいる。そのうちにこはばり、かたくなつて神護景雲寶龜となる。この意味で矢張り、この四月八日云々の墨書は天平中期前後を考へるのに矛盾しないやうに思はれる。

以上報恩院本を天平中期前後を以つて製作年代とする推定説を立ててみたが、では上品蓮臺寺本はどうか。一見同筆と見るばかりの相似があることは先に述べたが、仔細に之を見ると、違ふ點が多々ある。蓮臺寺本は報恩院本よりは緊り方に含みが薄いやうに見え、線も少し單純になつて居る。内題の「過去現在因果經」を見ると、よくその差が目立つ。報恩院本のはねが恰も直刀を以つてすつと直線に氣を放つが如きものであるが、蓮臺寺本は同じ所が、恰も薙刀のやうにはね上つてねばつてゐる。つまり蓮臺寺本と報恩院本とは

同形同識となすことが出来るが、これこそは時代的特色の共通するものであることを示し、個々の筆法の相違は、いはゞ筆者の個性差の現れである。依つてこの兩者は同系統にして餘り離れない寧ろ同じ時代の書寫であることを示し、筆者は異るといふ結論になるものである。それ故これ亦天平の頃に屬すとしていゝであらう。

尙益田氏舊藏卷四上殘卷十張は、近時切斷されて諸家に分藏されてゐるが、これは上品蓮臺寺本と矢張り書道は同系と思はれるが、然し字形の單純化は更にひどくなり、含みが遙かに薄くなつてゐて大分下るやうに見受けられる。これは上品蓮臺寺本系のもを見て書いたものであらうか。中に「是」といふ字があるが、是の字の日を丸く書いた書き方が一種獨特な筆法で、これに類する寫經に天平勝寶六年の銘を持つ瑜伽師地論卷第卅八^{註廿九}（石山寺藏）がある。結體を丸くする筆法が一脈相通するのであるが、益田舊藏本は突如としてこの一を交へるといふ狀況は、寧ろ師地論の書風の或る意味での流布か、或は感化といふことがあつたと考へた方がいゝであらう。それ故益田本書寫は早くとも天平勝寶の頃寧ろそれよりは以降といつた考への方が妥當であらうと思ふ。

尙、異體文字の側からも、奈良時代古寫經の時代測定に一つの暗示を與へないでもない。それは例へば果の字である。果が田木となつて立棒の通つてゐない古字は、大體に古い時代に限られてゐる。古い所では聖德太子御筆と傳ふる法華義疏をはじめとして、神龜五年長屋王願經にはこれが見られる。二月堂燒經、元興寺經等にも見

られる。そして大體天平も終り頃からになるとこの古字は段々見られなくなつてゐる。これが一般狀況である。この益田舊藏本は、果の字はどうかといへば、先に掲げたやうに立棒は通つてゐる。美校本、又益田本卷第三上共に通つてゐる。

擬て以上によつて、わたしは、古因果經に於ける二つに分けられる書道につき、一應の考察を終へた。之に依つて、祖本に異別が見られたやうなことが、書道に於いても、その依つて來たかと思ふ中國唐代書道に尙開きがあるやうに思はれたことは、殊に注目し値する所である。報恩院本系は隋の書風の餘影を持つ唐初の書道をほのかに察せしめ、美術學校本は高宗から則天武后の時代の盛唐書道の特色を持つてゐるといふことは、祖本の書寫年代測定に何等かの示唆を與へないであらうか。

擬て、残る所は益田氏藏卷第三上の一巻となつた。これは先に異體文字檢出の際に報恩院本との比較で少し觸れる所であつたが、これは報恩院本系にならつて書寫されたであらうことは既に云つた。然らば何時頃かといふと、字形の庸弱にして殆んど體をなすことが出來てゐない、ひどく案れたものであることは一見誰しも氣附く所であつて、進入のはねなどは正に平安時代初期の特徴を持つてゐる。だから我々は之を奈良時代とするに躊躇を感ずるものである。然らばこれに最もよく似た經卷は無いかと探してみるとある。高野山正智院に大般若波羅密多經卷第五百八十二がある。^{註卅}然しこれは殘念なことには書寫年月が無い。然し奈良末から弘仁期の作例である

ことはいへる。では奥書のあるもので、之に類する例をひくと石山寺藏大智度論卷卅四がある。^{註卅一}これは天長七年の書寫、上野國佐位郡教澄の持經で地方經の一種であるが、之をよく／＼見ると、その據本の文字を何とかして寫し出さうとして眞劍なる努力が見えてゐるが、腕のちがひでどうにもならぬ。粗雜な庸弱な書になつてゐる。

この情況がまことに益田本卷第三上に似てゐるから、移して以つて益田本の書寫事情とすることが出來よう。尙石山寺にある大同二年^(八〇七)書寫の辨中邊論^{註卅二}の下手さや、亦元慶四年と袖書のある諸經要集卷第十七^{註卅三}の案れた筆法も共に共にこの時代を表示してゐると思ふ。つまり此等は益田本が弘仁天長の頃の作ではないかと推量せしむる材料となるであらう。

以上不十分乍ら、各卷の書寫年代の推定を交へてその書道的意味を述べたが、多少混雜の嫌ひがあつたから、も一度繰り返して云ふと、古因果經の書風の根柢は、報恩院本系も美術學校本系も共に唐朝書道ではあるが、報恩院本の方が幾分古い傳統を傳へてゐて、唐朝の風をほのみせてゐる。美校本の方はそれらの跡を残さぬ程に完成した盛唐寫經體を傳へてゐる。わが國の傳統より云へば報恩院本の方がより古い系統であらう。美校本の方は然し彼より後に長くその傳統を傳へてゐる系統といへるが、その天平の盛期に於いては、兩者併立してゐたと思はれる二つの系統であつた。そして書寫年代は報恩院本は天平中期前後、上品蓮臺寺本は天平中期以降、美術學

校本は天平勝寶から寶字の頃、益田本卷第四上は天平勝寶以降、といつた順序と思はれる。そして報恩院本系の書道を以つてした益田本卷第三上は平安時代初期恐らくは弘明天長の頃かと推定するのである。年代測定を終つて興味を感ずることは、三條西實隆が室町の昔に天平七年聖武天皇の勅筆なりといふ記録を残したこと、正倉院の古文書に繪因果經の記録があるのが天平勝寶八年であることなど、偶然の符合ではあるが、注目をひく所である。

註一 千手千眼陀羅尼經奥書 日本國寶全集（六七） 參照

天平十三年七月十五日僧玄昉發願敬寫千手千眼經一千卷籍此勝因伏願皇帝陛下太上
天皇、皇后殿下、與日月齊其明共乾坤合其德聖壽恒永、景福無疆皇太子殿下及諸親
王等、文武百官、天下兆民、咸資化誘各盡忠孝、又願論迴於地獄熱煩苦餓鬼飢餓苦
畜生逼迫苦等衆生早得出離同受安寧遂令聖法之盛與天地而永流、擁護之恩被幽明而
恒滿、上臻有頂傍及無邊俱發菩提心頓悟無生理

註二 佛頂尊勝陀羅尼經奥書 高野山古經聚粹（五・六） 參照

天平十一年五月四日奉 勅爲玄昉僧正疾敬寫此經一千卷

註三 光明皇后發願一切經（五月一日經）奥書 古寫經大觀 參照

註四 善意發願大般若經奥書 古寫經綜鑒一五三頁 參照

奉爲大師故僧正大和尚、敬寫大般若經一部六百卷、意者天四時改變、八節推移、俄頃須臾、一周已度且俗禮有限、不敢固違、每想提獎之教則頃絕無期、念愍育之旨、則更何恃怙、今縱粉身碎骨以酬恩德、無過罄用私財、依憑般若、故今繕寫、奉翊幽靈、因此勝因、果成妙果 天平十九年歲次丁亥十一月癸酉朔八日庚辰 大唐弟子僧善意記（朱書）以普門寺本句切了本經校者常明

註五 行信發願大般若經奥書 古寫經綜鑒一三四頁 參照

若夫法海淵曠、譬彼滄波、慧日高明、等斯靈曜、受持頂戴、福利無邊、讀誦書寫、勝業難測、是以大法師諱行信平生之日、至心發願敬字法花一乘之宗、金鼓滅罪之文、般若真空之教、瑜伽五分之法、合貳阡漆百卷經論奉翊聖朝退報四恩兼救群品然假體

如浮雲草命似電光未畢其事合王從化、弟子孝仁等不勝風樹之傷敬辨先願仰願掛長聖朝金輪之化與乾坤無動長遠之壽爭劫石彌遠退願篤蒙四恩枕涅槃之山生菩提之樹位成灌頂力奮降魔廣及法界六道有識離苦得樂齊登覺道 神護景雲元年九月五日敬奉寫竟
註六 續日本紀天平十八年五月己亥僧玄昉死、玄昉俗姓阿刀氏、靈龜十二年入唐學問、唐天子尊爲法主三品、令著紫袈裟、天平七年隨大使多治比真人廣成歸還資經論五千餘卷及諸佛像云々

註七 彌勒上生經奥書 書苑七ノ二

久視元年九月十五日白衣弟子泥德達供養、普照寺僧法浪校定、交河縣龍泉鄉 賈方素抄

註八 阿毗曇毗婆沙卷奥書 插图第一參照

註九 樂毅論 東瀛珠光第一輯六圖參照

註十 瑞玉集 眞福寺善本集影參照

註十一 大乘阿毘達磨雜集論 石山寫經選二五圖參照

註十二 大庚內典錄 田中塊堂氏著 古寫經綜鑒二二圖參照

註十三 田中塊堂氏著寧樂寫經一書風の系統參照

註十四 觀世音菩薩受記經 青山莊清賞書蹟編二二圖參照

註十五 佛說彌勒上生經 田中塊堂氏著古寫經綜鑒一七二頁參照

註十六 紺紙銀泥華嚴經（二月堂燒經） 古寫經大觀一一六圖參照

註十七 田中塊堂氏著 古寫經綜鑒一九六圖參照

註十八 東大寺華嚴別供緣起（上略）遂以天平十六年歲次甲申、歸命三寶、降敕百寮肇建三識華嚴別供（中略）奉始經之日 天朝幸行盧舍那佛前、奉證波講。

（下略）（東大寺要錄 二三頁參照）

註十九 古寫經大觀二八圖參照

註廿 天平勝寶八年東大寺獻物帳 東瀛珠光第一輯第一圖參照

註廿一 註榜伽經卷第三 白鶴帖第二集三七參照

註廿二 石台孝經 書道全集卷九圖版一二六—一三一參照

註廿三 天平寶字寫阿含經 書道全集卷九 別刷の二

註廿四 文館詞林 高野山古經聚粹一一四圖參照

註廿五 靈飛經 書道全集卷九 二五八—二六一圖參照

註廿六 挿圖第三圖參照

註廿七 根本説一切有部毗奈耶 古寫經大觀三二—三六圖參照

註廿八 聖武帝雜集 書道全集卷九 三八—四一圖參照

註廿九 瑜伽師地論 石山寺寫經選三四圖參照

註卅 大般若波羅密多經卷第五八二 高野山古經聚粹六二圖參照

註卅一 大智度論卷卅四 石山寺寫經選二三圖參照

註卅二 辨中邊論 石山寺寫經選三六圖參照

註卅三 諸經要集卷一七 石山寺寫經選三九圖參照

六

然らばこの繪因果經の繪畫はどんな繪であるかを理解せねばならぬ段取りになつた。然し今は書道から見た古因果經の觀察を主としてゐる際であつてみれば、只この古因果經の書寫成立を考へるに必要な程度に觸れるに止めて、詳しくは又別の機會を待ちたいと思ふ。

然らばどの程度に必要なのかといふと、先に提出した課題の一つある所の、中國繪畫の臨模か翻案かの問題の解決であり、そして又それは直ちに、我國に於ける書寫關係の究明になるといふ點であらう。

それ故各卷相互の特色を比較觀察して見よう。

報恩院本は他の卷に比して最も藝術的技巧のみえるものであり、繪も立派である。樹の描き方なども、幹を勾勒描きにし、且つ淡墨を用ひ、登場人物は濃い墨で描き込んで、周圍から浮かせるやうな

寫經より見た過去現在因果經畫卷

工夫も見える。これは他の上品蓮臺寺本にも、美術學校本にも見えない親切な點である。他本では樹幹も一樣に焦墨が使はれてゐる。

木の葉なども報恩院本は綠青の上に葉の塊りの線を入れて居り、丁寧な描寫法をなしてゐるが、他本では共に疎略にし、たゞ綠青の點點とした塊團としてゐるに止まる。或は又臺や轎の框座などでも報恩院本では、確にそれとわかるやうに刻み込みの輪廓を現してゐるが、蓮臺寺本になるとより簡單化されて居り、美術學校本の如きはまるつきり刻み込みの輪廓なども省略してなくなつてゐる。或は又城門のやうな、この繪卷では特に興味を感じる題材であるが、美術學校本になると弱い線で略された所が多い。

この様にみてくると報恩院本は割合據本の様子を傳へてゐるものであつて、他の二本に比較してより忠實なる臨模であるといへると思ふ。之に對して上品蓮臺寺本、美術學校本は簡略化されてゐるのであるといへる。

然し尙よく觀察すると、後の二者は單に簡略化に止まらない。形式化の方向にはいつてゐることは注目に値する。先にあげた樹幹樹葉の描寫にしても或る形式によつて簡便化したものといつて差支へない。この例で最も好便と思ふものは岩の描き方であらうか。報恩院本には岩石にしる岩の山脈にしる、何處となく岩であり、岩山である。そこには自然性がある。然るに蓮臺寺本になると、遙かに形式化されて居り、山脈にしる個々の岩にしる、恰も太湖石のやうな形式になつてゐて、遠く自然性から離れてしまつてゐる。この差異

は最も性格的であつて、この兩者が持つ自然觀の根本相に於いて何等かの違いがあることの現れといふことが出來よう。益田舊藏本巻第四上は特に太湖石の多い場所であるが、これ亦形式化のひどいものといへる。美術學校本はどちらかといへば太湖石的な岩の多い卷であるが、その形式化は蓮臺寺本程になつてはゐない。山中や岩山は丸味のある形によつて描かれ報恩院本が寧ろ勁角のある岩山であるのに相對した特色である。報恩院本も卷の中頃よりは繪の描寫も餘り時間をかけず一定の形式によつて簡略化してゐる。そしてその簡略化の方式は大體三者に相通する所があつて殊に我々の注意を喚起するところとなるものである。これこそは、奈良時代繪因果經が描き繼がれて行くうちに自然と出て來た方式であつたと思はれるから、一面奈良時代繪畫の典型をなすものといへると思ふ。

登場人物は殊に相違があつて興味深い。報恩院本の顔は一寸大陸的の感があつて、細面で、精神的な風采といへるし、且つ氣むづかしい様子である。どちらかといへば老成的人間の感とでもいへるか。之に比して蓮臺寺本では打つて變つて豐頬で伶俐、明眸の感を與へる人物となり、ふくやかな感覺、總體に穩和である。そして何處となく若者らしい風采となつてゐる。これは大變なちがひといはねばならぬ。美術學校本亦ふくやかな感じであり、若者らしい風采となつてゐるが、更に何處となくやはらかな筆致が、蓮臺寺本とはちがつた感覺的なものを持つてゐる。中でも特に目立つものは例へば轎にのる頻毘婆羅王の圖を見てもわかるやうに一種の肉體的團塊

としての身體にボリュームが感ぜられる様に丸く、厚味が描かれてゐる。蓮臺寺本は之に比較すると可成繪畫的になつてゐる。

以上簡單ではあるが各卷の描寫形式より内容が幾分明瞭になつたと思ふ。もと／＼この過去現在因果經の繪は恰も下手な田舎芝居を並べたやうな繪卷であつて、その場面々々のつなぎに山脈や土坡、太湖石や、樹木などをあしらつてゐて、凡そ時間空間を無視超越した一種原始的な繪畫であるだけに、この様な性格の差異が認められるといふことは相當根本に横はる問題を暗示してゐるとしなければならぬ。そこで、私は古因果經の繪を次の様に考へてみた。

報恩院本は中國風を割合よく遺し傳へてゐるものであらうと思ふ。岩石の自然性、人物の老成的なる、共に中國的性格により近いものといへるやうに思はれる。かゝる意味に於いて、據本に最も忠實なる臨模であつたのではなかつたか。

上品蓮臺寺本は大體報恩院本と同系の如くであるが比べてみると、形式化されて居り、人物が若者的となり感覺のふくよかになつたことなど、頗る我國の風潮を反映してゐるものと思はれる。それ故、これは翻案の性格を多分に持つものではないかと思はれる。寧ろ報恩院本系の日本化といった方があたる。何れにしても繪はすつきり整理され整頓されてゐて、かゝる意味に於いて繪卷形式の様式論よりすれば報恩院本より進んでゐることは最も關心をそゝる所であらう。

美術學校本は、前二者に比べると性格を異にした差が感ぜられ

る。そのうちでも肉體描寫に於ける量感覺は、寧ろ唐代繪畫の寫實性を窺はしめて、中國的感覺に近いことを覺える。自然觀にしても、報恩院本よりは簡略化されてゐるが、その本質が違ふといふわけではなく、これは形式化の途上に於ける姿であつて、この兩者の差異の根本は、即ち勁角ある自然描寫に對して丸味ある自然描寫の性格を示してゐるといふことであらう。

それから又この卷にだけ佛に頭光が描かれてゐることも特異なる事柄である。だからこの點報恩院本系とも異なる系列のものであるとすることが出來よう。そして量感覺描寫等綜合してみると、可成り中國的性格を遺してゐるものと思はれる。然し尙報恩院本よりは形式化されてゐる爲に萬事が報恩院本と蓮臺寺本との中間形式と見られるのであつて、これはこれ迄の諸家の論述には必ず言及される特色である。然しこの意味は等閑視することは出來ない。つまり蓮臺寺本が日本化であり一種の翻案的性格があるとするならば、これはその先にあたるものとなるからである。換言すれば、蓮臺寺本は報恩院本と、又別本でもあらう美術學校本とその雙方から自分の構成要素を取り出してゐることとなるからである。現にそのやうに見ゆる例として先にも岩を引いたから、こゝでも蓮臺寺本にある岩の描寫を問題にしてみよう。山脈や或は岩山にある岩が蓮臺寺本ではすつかり形式化されて太湖石のやうな性格になつてゐる。然しこの岩は報恩院本の自然性からは到底出てきさうにも思へないが、一旦美術學校本の太湖石描寫を見ると、その描法が導入されたならば成程

寫經より見た過去現在因果經畫卷

かうもなるかと考へられるやうな岩となつてゐるのである。これなど蓮臺寺本が美術學校本系統より受けるものは受けてゐる例とすることが出來るだらうと思ふ。

このやうに見てくると、こゝに興味ある結果が考察される。それは經典の本文書寫に於いて報恩院本系と美術學校本系の二つの據本があつたことは已に述べたが、繪畫に於いても二つの據本が考へられ、そして報恩院本系經典のそれより出た上品蓮臺寺本はその土臺は報恩院本系でありながら、美術學校本系からも採るべきはとつて、以つてこゝに新しく日本風に整理按配された繪因果經を翻案した、つまり日本化したといふことになる。

然らば現存の美術學校本が蓮臺寺本を作る時に作用したものに當てることが出來るかといふと必ずしもさうとは思はれない。何故かといふと、美術學校本は實にたど／＼しい筆線で山脈にせよ木の幹にせよ、甚しく模本臭くして鑑識上再模と鑑定させる性質のものが著しい。この點は報恩院本殊に蓮臺寺本の、未だ初生な所を失はない線とは大變な相違である。それ故私は現存の美校本は據本の臨模の再模であるとしたのである。即ち美術學校本は、その據本を忠實に臨模したと思はれる、今は亡佚してしまつた本といふのがあり、その本の比較的ルーズな模本といふ事になる。それ故報恩院本系の據本をA本とし、美術學校本系の據本をB本とすると、上品蓮臺寺本はA本系即報恩院本と、このB本系本との間から新しく出てきたものといへるやうに思はれる。

挿圖第四 藥師寺印（大般若波羅蜜多經
卷第二百二十五 藥師經 五島慶太氏藏）

挿圖第六 挿圖第四・第五兩本照合藥師寺印

報恩院本は多く峻鋭な屹立する岩を用ひて、前者よりも古拙であるとし、美術學校本は前兩者の中間形式であるといつてゐる。且つ蓮臺寺本には象をなげる圖の如き逆勝手の構圖もあるが他にはないといつて、これら三本の傾向の差は何と解すべきかと疑問を投げてゐる。田口氏はこれへの解答は必ずしも用意はしてゐなかつたやうであるが、

挿圖第五 藥師寺印（報恩院本 過去現在因果經卷第三卷頭）

私のこの考へについて、「構圖より見たる古因果經繪」といふ田口信行氏の論文（畫說、昭和十五年一月號）はまことに興味深く讀んだ。田口氏は蓮臺寺本は視線が波線を畫いて左方へ左方へ展開しその進行も斜めの方向に奥へ導くので、スムーズであるとし、報恩院本は視線は直線的であり、進行は斷續的であり、美術學校本は平板なものといひ、區切り方も蓮臺寺本は固定的な土坡などで與へてゐるが、

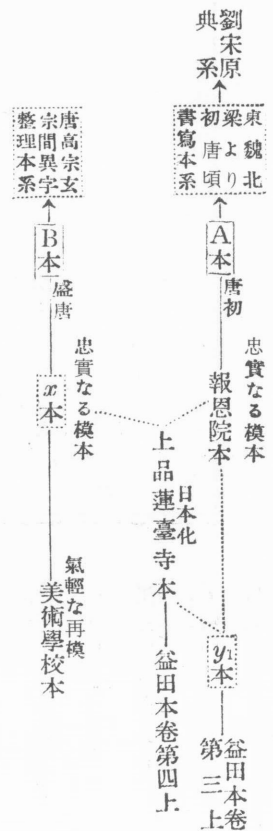
報恩院本は多く峻鋭な屹立する岩を用ひて、前者よりも古拙であるとし、美術學校本は前兩者の中間形式であるといつてゐる。且つ蓮臺寺本には象をなげる圖の如き逆勝手の構圖もあるが他にはないといつて、これら三本の傾向の差は何と解すべきかと疑問を投げてゐる。田口氏はこれへの解答は必ずしも用意はしてゐなかつたやうであるが、暗示的に、次のやうに云つてゐる。これは報恩院本より蓮臺寺本への過程を示すか、又は六朝から唐への歴史的展開を示すか、何れにしても蓮臺寺本に於いて中國から與へられたものを十分に同化した天平の生々した創作的意欲を感じとる事が出来るかと云つてゐる。實に俊敏なる觀察であつて、殆んど私と同じ意見であるだけに同志を一人得た如く思はれ愉快を禁じ得ない。それに田口氏の論文は數年前の發表であるから、私は田口氏に敬意を表して、その古因果經の繪の様式の論を借りてこゝの説明に代へたいと思ふのである。私のこの小論によつて何等かのものを附加し得たとするならば、これらの本が系統を異にすること、従つて又祖本の成立に對する検討の手がかりを提供した爲、結論をこれに差し加へることが出来たといふ點にあるであらう。

然らば尙この三卷の外に現存する益田氏舊藏卷第四上殘卷と卷第

三上一巻はどうなるのであらうか。卷第四上は文字の關係から云つても正しく上品蓮臺寺本系統のもので、繪畫は更に下手となり、ひどく亂雜となつた、蓮臺寺本と比較して年代の下るものであらう。恐らくは奈良時代中期頃に屬するであらう。

卷第三上一巻は圖様が報恩院本と殆んど同形で、同じ様式を追つてゐるから、明かにこの系統のものである。只甚しく見劣りがする。物體の形勢にしろ、人物にせよ、庸弱な線で、その物語らうとしてゐる意味さへ十分に把へずに描かれてゐる程下手である。例へば水の岸にあつて坐禪をしてゐる筈の釋尊が岸から遠く離れて森の中に居たりする、或は人が圓形をなして話してゐる筈なのが、足もとがぐらついて、圓形がでこぼこ出入してゐるの類である。空中に微塵となつて分身する圖に平行線の横線さへ満足に引けない。だから時代も下るし、又随分ひどいうつしといふ事になるが、扱て然し思ふにこれは報恩院本の直接の寫しとは思はれない。先づ第一に人物の顔なぞすつかり日本化されてゐること、岩が太湖石のやうになつてゐる所があるなどを思ふと、一旦日本化されたものを經てゐるのではないかと思ふ。換言すれば今はなき或はかといった本が間に介在してゐると思ふのである。

依つて以上を圖に示すと次のやうになる。



扱て、古因果經は信仰史の立場から云つて、二つの類に分けられることが出来る。報恩院本と上品蓮臺寺本とは、共に卷頭に印識不明の圓印二個があることは既に諸家にいはれ、又美術學校本と益田本とは興福傳法の方印があるからこれにより二類に分けられてゐた。この報恩院本の印はほんの一部分しか残つて居らず、且つ磨滅して字劃も判然としないが、然しよく見ると、藥師寺印の圓印かと察せられ、試みに原寸のものとあて、見ると、字劃圓弧共にびつたりとするから間違ひない。藥師寺圓印を二個卷頭に押した經卷といへば、藥師寺經或は魚養經と呼ばれる大般若經と、も一つは現在圓福寺に寄贈されて所管されてゐる、いはゞ圓福寺大般若經とである。藥師寺經は奈良朝末期即ち神護景雲頃から寶龜年間位の書寫と推定されるものであるが、圓福寺大般若經は奈良朝初期に屬すると推定される。それ故、古因果經もこの何れかに屬すといひたい所でもあらうが、因果經が般若經の中にはいるといふわけにはいくまいから、この藥師寺の圓印を押したとき偶々藥師寺にあつたといふ可きであらうか。それにしても圓福寺大般若經が奈良朝初期のものであるといふことは頗る氣持を惹かれる。然し、何れにしても、これ

で、報恩院本上品蓮臺寺本は藥師寺傳來であり、美校本益田本は興福寺傳來であることはいへる。わたしはこの意味で從來云はれた、第一種本第二種本といふ區別はあると思ふが、扱て然らば、これらは各類に於ける一具の寫經であらうか。これ迄これに就いては、疑を持たれてはゐなかつたやうだが、私は祖本關係、繪畫の性質等からして、どうかと思ふのである。その一つの理由として、第一種本では内題の書き方からちがつてゐる。上品蓮臺寺本は過去現在因果經だけであるが、報恩院本は過去現在因果經第三とあり、卷數をいれてゐる。同じく一具のものであるならこんな不統一がある筈はないと思ふ。又第二種本では美校本には卷頭に三津寺の署名があつて益田本にはなく、且つ書寫年代も少し開きがあるやうに見える。それ故わたしはこれらの類別は傳來の場所を示すに止めた方がよさうに思ふ。然し試みに紙長と繪と經と、その寸法を見ると案外面白い。即ちこの表によると、前三者は同一步調をとり、後二者紙長、

繪と經共に欄を擴大してゐることがわかる。それ故この兩者を二つの類に分割することは理由の立つものがあるやうに思はれる。然しこの相違は寫經の書寫年次の目安を示すもので、大體奈良時代古寫經の規格から云ふと、時代の下降に従つて紙長や罫間を擴める傾向があるから、この場合でも第二類が第一類より年次が下つてゐることを示してゐるに止まるのであつて、又同じやうな寸法と云ふものも書寫年次の接近を示すに止まり、それをそのまゝ一具の經典とするには、更に他に理由ある根據を加へる必要がある。然しそれには却つて次のやうな難點がある。例へば益田舊藏本に於ける果の字の異正報恩院本等との相違や、美校本と益田本とは據本A Bを異にしてゐることなど共に一具と見ない方がよさうである。殊に樫本氏も清閑誌上で、三津寺の署名は興福傳法の印より先といつてゐる。恐らくはそのやうに、藥師寺印も興福傳法も後の所藏者の印で、

別の經典が適々同所にあつた爲であるとしたい。

然しこの紙長等の規格からいつて書寫年次への想定を持つことは別の問題である。石田茂作博士は考古學講座「經塚」の中で寫經の

| | 一張ノ長 | 一張ノ豎 | 繪欄 | 經欄 | 罫間 | 天 | 地 |
|-----------|---------------------------------------|--------|-------------|---------------|-----------|---------|---------|
| 上品蓮臺寺本 | 一尺六寸五分 | 八寸七分五厘 | 三寸八分 | 三寸六分五厘 | 六分 | 六分 | 七分五厘 |
| 報恩院本 | 一尺六寸五分 | 八寸八分五厘 | 三寸八分 | 三寸六分五厘 | 六分 | 七分 | 七分五厘 |
| 益田舊藏本卷第四上 | 一尺六寸四分五厘 | 八寸八分五厘 | 三寸七分五厘 | 三寸六分五厘 | 六分 | 六分五厘 | 八分 |
| 東京美術學校本 | (前半十三張) 一尺八寸内外 (後半七張) 一尺八寸八分 | 八寸七分二厘 | 四寸二分—四寸二分七厘 | 三寸四分八厘—三寸八分三厘 | 五分二厘—六分七厘 | 二分—五分四厘 | 四分—七分四厘 |
| 益田本卷第三上 | 一尺八寸五分 | 八寸八分 | 四寸内外 | 三寸六分—三寸七分 | 五分五厘—六分五厘 | 六分 | 五分五厘 |

美校本の調査は樫本龜生氏「繪因果經古寫本の體裁について」(清閑第十六號)に依る。

紙長に言及して、一紙の長さが、天平時代で一尺五寸一分、神護景雲時代で一尺八寸八分、弘仁時代で一尺八寸五分と報告してゐる。

この報告は或は一例を示したに止まるとはいへ、適々古因果經には興味ある一例といへる。先に私が弘仁時代書寫かと想定した益田本は同じく一尺八寸五分、天平勝寶以降天平寶字の頃を考へた美校本は一尺八寸八分で神護景雲のそれに一致して居り、そして上品蓮臺寺本等は一尺六寸五分内外で、天平のそれよりは少し長くなつてゐる。これだけで結論を出すのは勿論尙早であるが、上品蓮臺寺本は天平末から天平勝寶の方へ、報恩院本も天平中期以降に、益田舊藏本は天平勝寶の頃に、美校本は天平勝寶ではなく神護景雲の方により近く、書寫年次想定の方付けが出来さうに思はれることは有難い。それ故私は、之を類別とせず、個々の差として置きたい。即ち、報恩院本はA系根本本、上品蓮臺寺本はA系日本化、益田氏舊藏本はA系日本化の第二次本、益田本卷第三上はA系亞流の第二本とし、それに對して美校本はB系本であると。

そして、わが國の如き傳統の長く續く國柄では、奈良時代の思想の社會的に續く限りに於いて、因果經の繪はかきつがれたと見て差支へない。それ故に又、奈良時代に於いてしばしばあつた一切經書寫の如き場合には、大いにその可能性があつたであらうと思はしめる。それ故、傳へられたA本B本は次々に寫され轉寫され、更に色色くづれたものが出てきたと思ふ。この狀況は尠くとも平安中期迄は考へられるだらう。その後鎌倉時代になつて再び奈良復興に當つ

寫經より見た過去現在因果經畫卷

て建長年間に新因果經が描かれ、その後も南北朝、更に下つて室町には永正本や勝利寺本が出てゐる。畢竟このやうにして繪因果經の傳統は傳へられたと思ふ。だから色々の時代差のある繪が描かれたのであるが、然し根本は畢竟A系B系の兩本に歸一される。私はここで傳統の問題に深入りするつもりはない。只すべてがA Bの兩本に依つてうけつがれたことを強調して信仰史の一端を述べたことにしたいと思ふのである。

そして繪因果經の傳統は、應仁戰國の亂世によつて失はれたことは、報恩院本上品蓮臺寺本の奥跋によつてその混亂を知ることが出来る。

附

然し、藥師寺の圓印があるといふ理由によつて、古因果經の一部と圓福寺大般若經と何等かの關係、たとへば同じ經藏に收納されて居たとか、或は一括して移動されたとか、或は積極的に、大般若經書寫の時に因果經書寫も祈願されてゐたとか、相當都合よき空想も出来ないことはないから、横道にそれるやうではあるが圓福寺大般若經を調べてみる必要はあると思ふ。田中堯堂氏の古寫經綜鑒によると、圓福寺大般若經六百卷のうち五百十五帖は奈良朝初期の寫經、他は藤原鎌倉時代の寫經及び版經によつて一具完備させてゐるといふ。その多くに、藥師寺の圓印二顆(朱)が卷頭に藥師寺金堂の長方形の印(之は黒印)が紙背袖に押してある。別筆の追記のあるものに、

卷第十一、

建久九年七月比、依去年祚雨、衆議學律相共令修補之内、五師大法師證

禪、分_レ手自營修補_二之。當寺古老隆縁五師云、此經西海浦浮寄、其櫃銘云、日本王爲_レ子修_レ善、仍送_レ之云々。即於_二掃守寺_一、以_二此經_一修_二般若會_一。而依_二洪水_一、當寺衆不_レ渡、依_レ之當寺修_二此會_一、即_二一部法花最勝_一當寺、於_レ櫃者掃守舍留_二之_一。守寺古老面語_二云々_一。

とある。即ちこれは建久九年修補の記のついでに、この大般若經がこの寺に入つた経緯を加へた一文で、もとの經は掃守寺にあり、掃守寺で大般若會を修してゐたのであるが、或る年洪水のため、當寺の僧が彼の寺に渡れなかつたから、この大般若經一部と法花經金光明最勝王經とを取り寄せ、かくて、こちらで般若會を修するやうになつた。そして「日本王爲_レ子修_レ善、仍送_レ之」といふ銘文のある經櫃は掃守寺に留め置いたと掃守寺の古老から聞いたといふ當寺の老僧隆縁の言葉を記してゐるのである。では當寺とは何處の寺か、掃守寺は何處にあるかといふと、これに就いては福山敏男博士の「奈良朝寺院の研究」掃守寺の項に詳しく説かれてゐる。掃守寺は天平年間の古文書にも出てくる名前で、藥師寺縁起によると法號を龍峯寺といひ、葛下郡の不多神山の近くにあることがわかり、且つ、

又七月廿三日、被_レ賜_二宣旨於藥師寺_一、請定六十口僧、差_二威從四人_一、七箇日之間、令_レ轉_二讀大般若經_一也、其布施在_二信乃國_一也。

とあつて、平安時代に藥師寺の僧がこの寺で毎年七月末に大般若經を轉讀してゐたらしいことが知られる。(同上六四頁參照)。

それ故、この圓福寺大般若經に藥師寺印がある所からして、建久九年の修補記に出る當寺といふのは藥師寺であらう。さすれば丁度藥師寺縁起のいふ所と合致する。(同上六五頁參照)とすれば、この經は長く掃守寺に傳はり鎌倉初期には明かに藥師寺に保管されてゐたことが知られたのである。

又大般若經卷第六百には

此御經長尾宮奉寄進 圓順盛助 敬
切山泰九郎 白

永正三年_{丙寅}八月六日坂原庄長尾宮寄進之者也

と長尾宮に寄進の追記があり、この追記の下に

於當社_{丁卯}自八月一日眞讀、一百ヶ日不動護摩每日三座始行、同十一月十八日未尅結願

金剛佛子權少僧都榮通

同弟子鶴丸十一才法花

として、永正四年八月から十一月にかけて大般若會を修してゐることが知られる。

次いで、六十八卷不足してゐたのを庄内で勸進し、經師祐性に修復せしめた記事及び勸進者五人の名を連ねた追記がある。尙別筆にて、

奉修覆大般若經一部六百卷、其經乃行行列_二華文_一、句句含_二深義_一、讀誦者獨_レ耶去惡、披閱者納_レ福臻榮、以_二此善業_一普_三及一切_一、仰願法界含識六趣靈、無_レ願不_レ遂有心必獲明矣、因果達焉、罪福六度圓滿四智果圓

千時萬治二年歲次丁亥初秋二十一日談山妙樂寺文殊院法印圓秀

とある。この願文は神龜五年長屋王發願の大般若經の願文より採つてゐることは注目すべく、時に萬治二年、即ち江戸初期には談山即ち多武峯の妙樂寺に移つてゐたことが知られる。

以上によつて、藥師寺に移つてゐた大般若經が、室町時代の中期に及んで、永正三年長尾宮に寄進されてゐることを知るのである。長尾宮といふのは長尾天満宮のことで、醍醐にある。江戸末に火事を失し多く古記を焼いたので、古い所を調べる由もないが、三條西實隆公が繪のある因果經を見てその記録をのこしたのが大永八年であるから、永正三年よりすれば二十三年目に當る。その時三島治部に返したといふから、三島治部と長尾天満宮とに何か關聯があることがわかれば、差しづめ實隆公が見たのは多分この一聯のものではないかと思はしめ、この大般若經と一括されて古因果經もあつたかと想像せしむるわけと

なるであらう。實隆公が天平七年聖武天皇の宸筆であると鑑してゐる所のこの天平七年亦奈良時代初期とすれば略々時代があたつてゐるだけに想像に翼が加はるやうである。

そして萬治二年には多武峯に移つてゐるが、この間に於いて中山慶親權大納言家に繪因果經だけが移つたと想像すると、報恩院本等の來歴を追ふことが出来るかもしれない。中山家と長尾宮、多武峯等との關聯がわかると面白い。これらの究明は凡て歴史學専門の方々の御努力に俟つ所であるが、若し、報恩院本等が長尾宮にあつた大般若經と一括されてゐたといふことになれば、差し當り、來歴を追つて建久九年の藥師寺の記錄に結びつけることが出来る。すると、建長四年の新因果經は、約半世紀の後となるから、これも好都合な次第となる。すると建長の長尾宮は藥師寺傳來の方の古因果經によつたかといふことになり、益々面白い。

天平勝寶二年十二月廿四日の造東大寺司權納經注文に、

(二合、納大般若經一部、奉請掃守寺(大日本古文書 十一ノ四四九頁))とあり、東大寺寫

經所で寫した大般若經一部を、これより先に掃守寺へ請じ渡したことが知られる(奈良朝寺院の研 究六三頁參照)。これらの古文書は圓福寺大般若經を考察する一つの手がかりであるといふことは出來よう。何れにしても想像を逞しうすれば、古因果

經は奈良時代掃守寺に傳へられたものであつたといへるかもしれない。掃守寺は藥師寺緣起に天津皇子に因めてゐるが、福山博士は附會の説であらうといつて居り恐らくは掃守氏の氏寺として造られたものか(同上六 四頁)とされてゐる。掃守氏には大化五年には新羅に遣された者、白雉四年には遣唐副使となつた者もあり、外國の文化を早くより受け入れてゐた家柄である。

七

寫經より見た過去現在因果經畫卷

以上、各節に互つて、書道より見た繪因果經に就いてその經緯を述べたが、尙繪畫より見たる繪因果經といふ殊に中國に於ける祖本の問題を究明しなければならぬが、餘り長くなり過ぎるから之は次の機會にゆづつて、今は書道より見たそれを以つて、一應結論付けたい。それ故こゝで過去現在因果經の概觀を試みたいと思ふ。

抑も過去現在因果經は、第二世紀後半後漢のとき將來された經典であるが、六譯を重ねて、宋の文帝のとき即ち第五世紀中葉に翻譯が完成した。翻譯當時の原典は古因果經よりは求むるわけにはいかぬが、第六世紀初頭頃に寫された寫經をもとにして第七世紀初頭即ち唐太宗の頃迄に書かれた經典が古因果經の據本の祖本となり、これにいつか、繪が加はり、かくて繪因果經の原本が作製された。未だ繪畫の論に言及しない所であるから、いつといふべきかはそれ迄待つことにして今は假説として隋末から唐初にいてみることにする。この原本を本文のまゝ受けたのが第六節に擧げたA本の系統である。更に原本を高宗玄宗間に即ち第七世紀後葉から八世紀初頭間に正字に整理された寫經に直した別本のB本が派出した。この時繪畫は傳統を踏襲してゐるが、一應盛中唐風の變形もあつたと思はれる。そしてこの系統でわが國に傳へられたものは恐らくは高宗の末年頃以降に寫されたものと思はれる。然しA、B兩本の據本がいつ我國に傳へられたかは資料がないからよくわからない。

かくてA本系では、天平中期の頃に、比較的忠實なる臨模として報恩院本が残り、それと略同じ時代に或は少しおくれて上品蓮臺寺

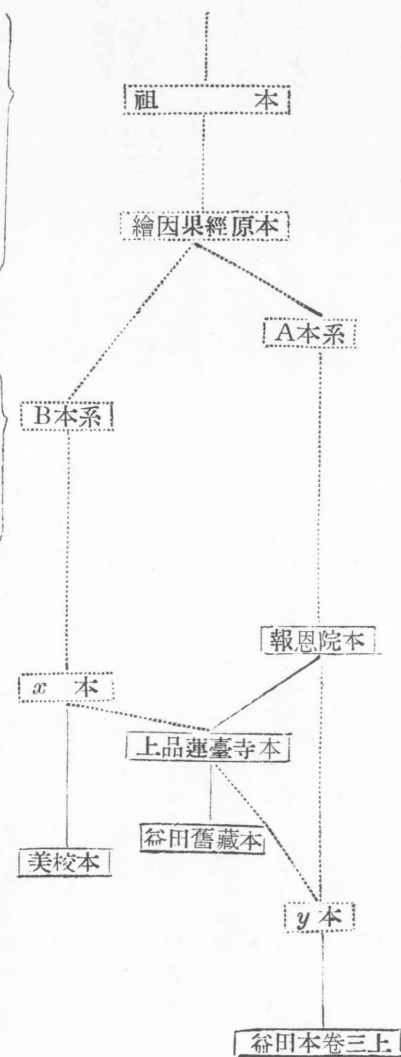
| | | | |
|----|----------|--------------------|---------|
| 後漢 | 靈帝 | 168—188 | |
| | 獻帝 | 190—220 | |
| | 建安二年—十二年 | 197—209 | |
| 吳 | 黃武年間或へ建興 | 222—228 252—257 | |
| 東晉 | 安帝 | 397—418 | |
| 宋 | 文帝 | 元嘉二十一年—三十一年 | 444—453 |
| 梁 | | 第六世紀初頭 | |
| 北魏 | | | |
| 東魏 | | | |
| 北齊 | | | |
| 隋 | 太宗 | 貞觀第七世紀初頭 | |
| 唐 | 高宗 | 龍朔後第七世紀末葉 | |
| | 中宗 | 景龍 | |
| | 睿宗 | 開元十八 | 730 |
| | 玄宗 | | 740 |
| | | 孝謙 | 749—756 |
| | | 淳仁 | 757—764 |
| | | 稱德 | 767—769 |
| | | 寶龜 | 810—833 |
| | | 弘仁 | |
| | | 天長 | |

- 第一譯 小本起經二卷(小本起經系1)
 第二譯 瑞應本起經二卷(中本起經系1)
 第三譯 修行本起經二卷(小本起經系2)
 第四譯 太子本起瑞應經二卷(中本起經系2)
 第五譯 過去因果經四卷
 第六譯 過去現在因果經四卷

翻譯完成 四卷本

コノ間ニ古因果經ノ據本ノ祖本ガ出ル

コノ頃繪ガ入り繪因果經トナル(假定)



五卷本因果經(開元錄)

五卷本因果經書寫(正倉院文書)

繪因果經(正倉院文書)

本か、B本系をつぐ今は残つてゐないB本の方からも影響を受けつ、報恩院本系の日本化としての作例を示した。益田氏舊藏本卷第四上は、上品蓮臺寺本の系統をついだもので、天平勝寶の頃に屬する。又報恩院本から出て、今は亡き日本化のB本を通した益田本卷第三上は、平安時代初期、恐らくは弘明天長の頃の作であらうと思ふが餘りいゝ模寫とはいへない。

B本系では、B本は恐らく天平時代と思はれる忠實なる臨模だつたらうが亡佚した。そのB本から天平勝寶から寶字頃美校本は出たが、B本程忠實な臨模でもなかつたやうだ。

以上、益田本卷第三上だけが九世紀初頭の作で、他は前後はあるが大體八世紀中葉頃以降の作である。之を圖にすると前頁のやうになる。

(附、新因果經に就いて御教授を賜つた田中一松氏に深く感謝の誠を捧ぐ。)

参 考 論 文

- 過去現在因果經 (國華十一號)
過去現在因果經 小杉樞村 (國華七七號)
過去現在因果經 (漫錄) (國華一七三號)
過去現在因果經畫卷に就て 藤懸靜也 (國華三六五號)
久邇宮家御藏の過去現在因果經に就て 藤懸靜也 (國華四〇〇號)
繪因果經私考 上下 松本榮一 (國華六四八、六四九號)
過去現在因果經に就いて 中村旭峰 (大毎美術五ノ八)
過去現在因果經繪卷の考 仲田勝之助 (中央美術七二號)
過去現在因果經の研究 樋畑雪湖 (書畫骨董雜誌一八九)

寫經より見た過去現在因果經畫卷

珍らしき因果經繪

上品蓮臺寺の過去現在因果經

過去現在因果經繪卷——繪卷の本質と起源

過去現在因果經繪卷に就ての一考察

因果經及五重塔壁畫

過去現在因果經 上品蓮臺寺本 報恩院本

美術學校本

過去現在因果經斷簡 圖版解説

繪因果經樣式試論

構圖より見たる古因果經繪

繪因果經考——田中光顯手翰

繪因果經に就いて

過去現在因果經

繪因果經の體裁に就て

過去現在因果經 解説

慶忍筆過去現在因果經

慶忍及聖衆丸筆過去現在因果經 根津本

過去現在因果經 解説

古寫經綜覽

繪過去現在因果經解題——東京美術學校所藏本——

過去現在因果經繪 (東京美術學校藏)

繪過去現在因果經

古因果經講演拔粹 (美術研究所に於て)

大村西崖 (精華一三號)

小杉樞村 (日本學界雜誌一〇號)

中井宗太郎 (制作一ノ九號)

中井宗太郎 (佛教美術五)

内藤堯寶 (美術畫報五一四)

日本國寶全集 (三六)

(四四)

豐岡 (美術研究四一)

下店靜市 (東洋美術二四)

田口信行 (畫說一五ノ一)

(書道八ノ九)

田中塊堂 (書道八ノ九)

鈴木進 (生活美術一九)

榎本龜生 (清閑一六)

中川忠順 (古寫經大觀)

(國華一七八號)

(日本國寶全集四六)

(日本名畫百選)

田中塊堂 (昭和一七年九月出版)

大塚巧藝社

(日本美術資料一)

世界美術圖譜

福井利吉郎 (昭和十一年)